

魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名: 押塚 雄史 所属: 千葉県立東金特別支援学校 記録日: 2024年 2月 24日

キーワード: 不登校 自己肯定感 ドローン プロジェクションマッピング

【対象児の情報】

・学年

高等部1年

・障害名

知的障害 精神障害

・障害と困難の内容

小学校から6年間続いた不登校による社会経験の不足

自己制御、感情表現の難しさ

【活動目的】

・当初のねらい

今年度の学習目標

- ① 学校や友達の為に Pepper のプログラミングを行い、文化祭や全校集会で使ってもらい自己肯定感を高める
- ② 友達とチームを組んでプログラミングを行い、互いに評価・改善をしていける人間関係の育成
- ③ チームとして「学校の為に役立つ活動」を行い、自己肯定感を高める
- ④ 上記を通じて信頼できる人を増やす

・実施期間

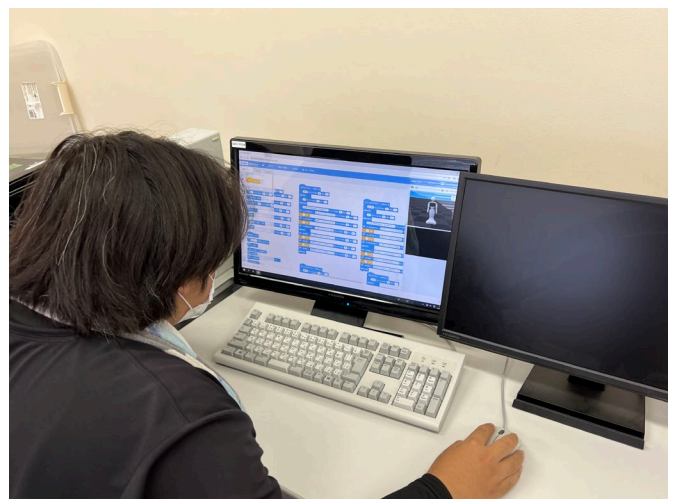
令和5年4月～令和6年3月

・実施者

押塚 雄史

・実施者と対象児の関係

学級担任



Pepper のプログラミングに取り組む様子

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

生徒の実態

・小学校3年生頃から不登校

・将来社会に出なければならないという思いから、中学3年の進路決定時から特別支援学校入試の為、登校を始めた。

・集団生活を始め、実態が大きく変化している。

基本的な生活習慣

・夜型生活から、規則正しい生活を送るように変わってきた。

・入学以降欠席は病欠6、通院6(2月末まで)

・学校に必要な物はメモを取り、自分で買い物に行き揃えることができる。

運動・動作

・自転車に乗って通学している。

・運動は苦手な疲れやすい。

社会性

・自分から集団にかかわらない、という引継ぎだったが、変わってきている。

・4月は、注意を受けたり、上手いかなかったりしてイライラした際にその場を飛び出す、周りに乱暴な言葉を使う、机を蹴る、等の行動が見られた。

・ルールを守らなければならない理由、なぜそのルールがあるか等を考えるように繰り返し指導し、本人が自身の課題を理解してからはそのような行動がなくなっていった。

コミュニケーション

・言葉でのやりとりができる。

・大人との会話を好むが、生徒同士の会話もできるようになってきた。

学習理解

・小学校から学校に通えていないのでほとんど定着していない。

・書くことを極度に嫌がっていたが、スマートフォンを活用するようになってからは、一度メモを作成し、それを書き写すことで書くことを拒否することは少なくなった。

・家で過ごしていた時期に読書や独学で勉強したとのことで、文字の読みは小学校高学年程度、語彙も多い。

ICTスキルに関して

・スマホを日常的に活用している。

・プログラミングに関心がある。

・小説、ニュース等をスマホで読む。

・「引きこもらずに学校に通っておけばよかった」という発言もあり、学習空白を埋めたいと考えている。

困り感

・人に認めてもらいたい

・社会に出る為に困らない程度の学習をしたい

・将来就職しなければならない、というプレッシャーがある

担任の願い

・信頼できる友達、先輩、大人を作ってほしい

・人の役に立つ経験を積み重ね、周りとの良い関係を築いてほしい

・活動の具体的内容

4月～

・選択情報、総合的な探求の時間、学級活動等の時間等でプログラムチームを結成し、学校行事で活用できるプログラミングを行った。

・教室にいる Pepper に関心を持ち、動かし方やプログラミングでできることについて学びたいと発言。

・選択情報の授業内、休み時間等を使いプログラミングを始める。

・昨年度プログラミングを学んでいた先輩と仲良くなり、教えてもらったり、自分のイメージを伝え、どのようにすれば可能か等の相談もしたりできる関係を築く。

6月

・学校紹介動画作成の依頼がくる。

・「ドローンを使って航空動画を撮りたい」

「ドローンからの映像はみんな見たことがないだろうから興味をもってくれる」等、アイデアを出してくれる。



グループでプログラミングに取り組む様子

9月

・ドローンの操作練習開始

・文化祭でドローン映像を使ったプロジェクションマッピングを作成することになる。



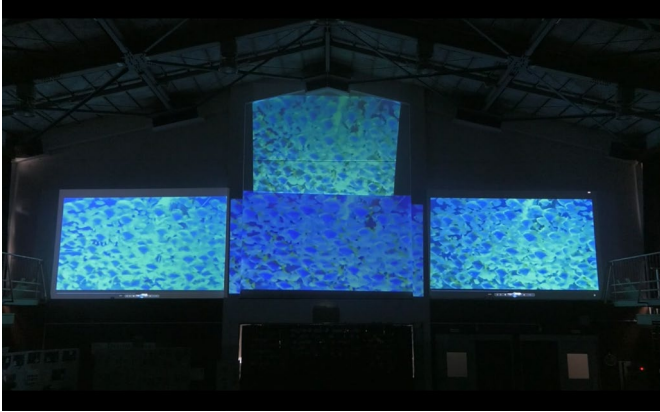
対象生徒が撮影したドローンからの画像



ドローンの飛行練習風景

10、11月

・プロジェクションマッピングの為動画編集、試行を繰り返す



体育館の壁面に4台のプロジェクターを使って動画を映し出す

・対象児の事後の変化

- ・暴言や教室を飛び出す等の行動の明らかな減少が見られた。
- ・理由を本人に尋ねると「学校に居場所ができたから」「理解してくれる人がいるから」等と答えた。
- ・将来就職をしたいという気持ちが強く、周りからの評価を意識していることも事実であると感じるが、友人ができたことによって本人の言う「理解してくれる人」が増えたことも要因になると考える。
- ・技術が上がっているだけでなく、他者の目線で「こうしたらわかりやすい」「小学部にもわかるように作りたい」等、相手のことを考えて作ることができるようになってきた。
- ・アイデアを出した時、受け入れて実現させてくれる仲間・教員の増加。
- ・対象生徒の技術だけでなく、努力している姿を見たり知ったりして協力してくれる周りの友達・教員が増えていることもモチベーションに繋がったと感じる。

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき

- ・不登校と引きこもりにより社会経験が乏しく、限られた人間関係の中で生活をしてきた対象生徒が、興味のある活動を見つけ、仲間を増やしながらか活動を進めていっている。
- ・当初は自分のできることや、やっていることを認めてもらいたい、という気持ちが強かったと感じるが、現在はそれだけではなく、友達と活動できることを楽しんでいるように見える。
- ・発想力があり、それを実現してくれる仲間に信頼をもてるようになってきている。

エビデンス(具体的数値など)

- ・教室を離れる、感情的な表出、その場に合わない言動、等の減少
- ・4月は週に1~2回あったが、2学期は1回、3学期は0、とほとんどなくなった。
- ・自分で感情が昂ることが想定される場面を事前に理解し、対策をとることができるようになったことが大きいと感じるが、周りに相談できる環境ができたことも要因の一つであると考え。

その他エピソード(画像などを含めて)

- ・生徒会役員選挙に立候補し、当選。
- ・自分に自信がもてたこと、「学校や友達の為に自分ができる活動をしたい」等の発言が聞かれた。
- ・上映したプロジェクションマッピングを動画投稿サイトに掲載することも考えたが、実現できなかった。
- ・本人は他の形でたくさんの人に見てもらえる機会を考えている途中である。